

## 当惑する生理心理的存在物と印象管理—ゴフマンからはじめる感情社会学

Embarrassed Physio-psychological Entity and Impression Management: Goffman's Breakthrough in Sociology of Emotion and Beyond

中河伸俊 (関西大学)

tipitina@nifty.com

### 1. 感情の社会学と C-P 論争

感情の社会学は、自己論 (つまり自己をめぐる諸現象についての社会学的探究: 中河 2010; 2022) の重要な一環である。こう言い切っても、現時点では、違和感を抱く人はそう多くはないのではないか。しかし、社会学の歴史の中では、ある時期までは必ずしもそうではなかった。一例を挙げれば、デカルト・カント以来の理性 (合理性) をめぐる思考を受け継いだウェーバー (彼が新カント派の知的影響圏内にあったことはよく知られている) の行為論では、主に考察されたのは各種の “合理的行為” であり、“感情的行為” は「合理的でないもの irrational acts」<sup>i</sup> として一種の残余カテゴリー扱いをされていた。そうした行為は、彼の「理解社会学」における意味理解の範囲の境界近くもしくはその外に位置し、つまり、正面切って社会学的考察の俎上におかれるような素性のものとは考えられていなかった。<sup>ii</sup>

そうした流れが大きく変わったのは、1970 年代後半から 80 年代にかけてのことである。この時期に、ホックシールド、ケンパー、シェフ、ショット、アヴァリル、デンジン、コリンズ等々この分野の主要な論客が登場し、情動や感情<sup>iii</sup> の本性や仕組みについての基本的な想定をめぐって、構築主義とポジティヴィズムを自称する二つの陣営間の論争 (Constructionist-Positivist 論争) が繰り広げられた (詳しくは、中河 1999 参照)。情動や感情が生起し経験される過程について、文化相対主義をとり社会化と行為者の主観的な意味付与 (⇔状況の定義) を重視する立場 (たとえばショット Shott 1979) と、生理的メカニズムを社会的要因と直結させる立場 (たとえばケンパー Kemper 1978) とのあいだのこの論争は、サピア=ウォーフ仮説の感情版やジェームズ=ランゲ説、シャクター=シンガー実験を論拠にした「感情のラベリング論」、ダーウィン=エクマンの感情表出の普遍性説といった以前から論議的になってきた論点の当否の論議を明示的または潜在的に含むものであり、そして、この分野の主要な視点のストックはこの時期に出揃ったとっていいだろう。<sup>iv</sup>

1982 年 11 月に没したゴフマンは、こうした感情の社会学の勃興のフェーズに直接関わ

ってはいない。しかし、彼の所説を足がかりにした、ホックシールドの感情管理 (emotion management) 論、シェフの恥 (当惑) をキイ概念とする社会過程論 (Scheff 1997; 2013) ⅴ、コリンズの相互行為儀礼の連鎖 (IRC) 理論 (Collins 2005) がこの時期に登場し、とりわけ、ホックシールドのゴフマンにダーウィン、マルクス、フェミニズム、精神医学を接ぎ木した (盛りだくさんすぎるといい) 議論 (Hochschild 1983=2000) は、感情労働という新しい視点を提示して、広く知られるようになった。感情の社会学における構築主義 (その認知的構成を強調する面に目を向けるなら構成主義という訳語のほうが適切かもしれないが) の提唱者の多くは結局のところ、自称ミードの継承者ブルーマーが音頭を取ったシンボリック相互作用論 (以下 SI) に連なる論者だったが、ゴフマンはそうした人たちの論議の場に、ジンメルやデュルケムを踏まえ相互行為に照準を合わせた独創的な視点と洞察を間接的なかたちで注ぎこんだといえる。

## 2. 印象管理と感情管理

報告者の場合、ゴフマンの感情に関する論述というともまず思い浮かぶのは、『行為と演技』 (Goffman 1959=1974 以下、PSEL と略す) での印象管理 (もしくは印象操作 impression management) をめぐる議論と、『出会い』所収の「ゲームの面白さについて」 (Goffman 1961=1974) でのユーフォリアとディスフォリアについての所説、『集まりの構造』 (Goffman 1963=1980) での適切な水準の感情表出を伴う関与配分の表示義務の指摘、『儀礼としての相互行為』 (Goffman 1967=2012) 所収の「当惑と社会組織」における当惑の社会的機能の考察、『フレーム分析』 (Goffman 1974) での笑いの溢れ出しによるフレーム破壊への論及といったあたりである。この中でも、主著のひとつ PSEL での論述が、ゴフマンのこのトピックへの姿勢を、もっとも明確に示している。ゴフマンの関心事は情動や感情そのものではなく、相互行為場面における情動や感情の現れおよび提示と、それを重要な一要素として含む自己と状況の定義をめぐる対面的コミュニケーションの過程なのである。

相互行為の場面で、言い換えればやりとりをする相手である他者の面前で、私たちは否応なく何者かであらざるをえない (私たちは透明人間ではないから、自分が何者であり、その場がどんな場面であり、自分は何をどんな理由でしようとしているのかについてその場にいる他の人が理解する手がかりになる多種多様な情報を搬送する手段となる身体や衣装や、さらには持ち物や舞台装置等々を衆目に公開してその場にいる)。私たちは相互行為の場で、多くの場合何者かであろうと企図するし (その「何者か」は同時に複数であったり相互行為の焦点が推

移すにつれて移り変わったりもするが)、そして多くの場合何者かであることを義務づけられている。企図したり義務づけられたりしている何者かである(ように見える)ために、私たちはその場で、常識的理解を大きく踏み外さない程度の表出上の一貫性(expressive coherence)を求められる。「パフォーマンスにおいて表出上の一貫性が求められるということは、とりもなおさず、私たちのあまりに人間的な自己と社会化された自己とのあいだに重大な乖離があるということだ。人間としての私たちはたぶん、その気分とエネルギーが刻々と変わるうつろいやすい衝動をそなえた生きものなのである。しかし、オーディエンスを前にして演じられる役柄としての私たちは、感情の浮き沈みに左右されてはならない。デュルケムが指摘したとおり、私たちの高次の社会的活動が、『われわれの感官や体感的状態のように身体に盲従する』のを許してはならないのである。」(PSEL p.56 中河訳) 言い換えれば、印象管理(印象操作 impression management)の要請は、私たちの日常生活に抜きがたく組みこまれた社会的な事実なのである。

さて、『管理される心』におけるホックシールドの感情作業(emotion work)というキーワードは明らかにゴフマンの面目維持作業(face work: Goffman 1967=2012)を下敷きにしたものだし、そして、たとえば PSEL の 6 章の不適切な情動を隠蔽し適切な情動を提示するという相互行為の中での「自制」の能力についての記述(注に該当部分の抜粋あり→ vi)は、ホックシールドの感情管理論の出発点のひとつであるに違いない。さらに、前掲の「当惑」論文では、相互行為の中で参加者にしばしばもたらされる当惑の徴候や、それを隠そうとするさまざまな身振り、他者に当惑をさせないようにする気転の発露や、他者の当惑に気づかないふりをしようとする試みなどが論述されるが、それもまた彼女の感情管理論のひとつの踏み石になっただろうと推察できる。

ホックシールドは、相互行為の中で参加者は情動や感情の表出を抑制する/創出するというゴフマンの観察に、表層の演技/深層の演技という区分を掛け合わせて感情管理作業の四象限を定式化し、それを踏まえた公領域(職場)と私領域(家庭)のそれぞれにおける感情管理のあり方を調査の課題にして、公式組織の中でのマニュアル化された感情労働がときに対人サービスにたずさわる労働者を心理的な疎外状態に陥らせるというテーゼを示した(Hochschild 1983=2000; Hochschild, with Machung, 1989=1990)。ホックシールドの感情管理論、なかでも上記のような感情労働論は質的な経験的研究のプラットフォームとして(ゴフマン以上の)成功を収め、それに沿った調査研究が輩出した。

ホックシールドがその所説の中でゴフマンの演技論に付け加えた独自の論点は、近代演

劇の教育訓練で広く使われるメソッド演技法をヒントにした深層の演技の概念である。「感情モデル—ダーウィンからゴフマンまで」と題された付説 (Hochschild 1983=2000: 228-252) で、ホックシールドは、その深層の演技 (行為者自身が特定の相互行為場面で求められる感情経験を自分で創り出すという「内面の操作」を伴うパフォーマンス) <sup>vii</sup> を引き合いに出して、ゴフマンの演技論の欠落を指摘した。ゴフマンの印象管理論は表層のレベルの演技に関するものに終始し「発達した内面生活を営む自己に関する視点」を欠く (同上 246)。深層の演技を考察するには、感情管理を能動的に行う「感情経験の主体としての自己」、言い換えれば、「I」(ミードの主我)の感情に関わる部分についての目配りが不可欠だといふのだ。こうした「I」の主体性・能動性についての主張を担保しているのは、シャクター=シンガー説を拠り所にした「感情のラベリング論」である。生理的な興奮 (arousal) は認知的な枠付け (主観的な「状況の定義」) しないでさまざまな別様な感情経験をもたらさうといふその所説によって、感情管理にたずさわる「I」は生理的過程の縛りから解き放たれフリーハンドを与えられる。

しかし、考えてみれば、そうした心理学や (SI の教理問答に忠実な米国の) 社会心理学の視点をスルーして、<sup>viii</sup> コミュニケーション論的、つまりは相互行為論的な研究関心にもとづいて徹底した観察と省察を進めたことこそがゴフマンの美点なのである。<sup>ix</sup> ゴフマンの研究関心はある意味で、そうした SI 的な社会心理学よりもむしろ、ホックシールドが有機体モデル (organismic model) として批判の対象にしたダーウィンの情動研究 (Darwin 1982=1931) のほうに近いということもできる。<sup>x</sup> ダーウィンの研究課題は、じつは情動そのものではなく同種の動物間で信号として機能する情動の表出なのであり (動物に感情経験を尋ねることはできないからそれは当然だ)、そしてその探究の目的は、動物の中でもっとも発達した表情筋を駆使してディスプレイされるヒトの表情もじつは進化のひとつの産物だと示すことだった。ただし、社会学者であるゴフマン (そして私たち) が取り扱うヒトには、他の動物と違って装ったり「ふり」をしたり嘘をついたりする能力があり、<sup>xi</sup> そしておたがいにそのことをよく知っているから、私たちは他者が送信したり (give)、意図的ではなく放出した (give off) ように見える表出信号をしばしば素直に文字通りのものとして受け取ることができず、<sup>xii</sup> 「本当のところ」はどうなのかを知ろうとして、たとえば「隠蔽、発見、偽りの開示、それが偽りであることの再発見というふうが続いて、終わりのないサイクルとなる可能性があるある種の情報ゲーム」(PSEL: 8) のとぼ口に立ってしまったりする。

ヒトと動物とのもうひとつの違いは、情動や感情の表出は、数多いコミュニケーションの

チャンネルのひとつに過ぎないということだ。その進化論的根拠や生理的基盤がどのようなものであるにせよ、そうした表出は、身体的特徴や化粧・衣装や小道具類・舞台装置、言語的な発話などとともに相互行為の参加者のパフォーマンス（行為の遂行 and/or 演技）の多いリソースのひとつであり、そしてそれらを込みにしたゲシュタルト構成を介して、そのパフォーマーはだれであってどんな立場にあるのか（アイデンティティ）、その場はどんな場なのか（状況の定義 xiii）、そこで何が行われているのか（活動の定義）という三種の理解がたがいにたがいを裏づけあうかたちで相互反映的（reflexive）に達成され、相互行為をとりあえず先に進めることができる程度の実務上の合意（working consensus）が成り立つ。しかも、パフォーマンスにあたってヒトはチームを組み、空間にチームのパフォーマンスと関わる領域区分を設けて、それを印象管理の重要な資源にする。さらに、相互行為を守ろうとする自制や気転といった努力（その中には「見て見ぬ振り」まで含まれる）と、相互行為の中での自分の立場をよりよくしようとする努力、「本当のこと」を（しばしばひそかに）知ろうとする努力といった営為が微妙かつ複雑にリンクするから、社会学者はダーウィンよりずっとややこしい社会生活と感情生活を観察の対象にしなければならない。

大きなネコの威嚇に怯える小イヌや、親の懐に抱かれて笑顔を見せる乳児を観察して、私たちは、言語が介在しないところにも情動があるとかかなり強い確信とともに推測することができる。また、そうしたケースから、動物と人間の表情の連続性についてのダーウィンの指摘の有益性を確認することもできる。しかし、いっぽうで、一定の具体的な社会的状況の中で私たちが感情を経験するとき、私たちは日常言語の諸概念を介在させて状況や出来事を把握し感情を経験したり同定したりしている（試験で悪い成績を取って「うつな気分」になるためには、もちろん試験や学生や成績とは何かを知っていなければならない）。しかし、それは、サピア=ウォーフ仮説と感情のラベリング論に依拠する SI の感情の社会学が主張するように、中立的な生理的興奮に解釈を通じて意味付与がほどこされた結果感情が経験されたというような事態ではなく、より直接的な情動の知覚なのである。たとえば、道にとぐろを巻いているへびを見て怖いと感じるには、へびの視覚情報に解釈を加える必要はなく、へびという概念をさえ持ちあわせていれば（ごく小さい子どもは持っていない）それで充分だ。

「[...] 適切な諸概念を持ちあわせている人が、通常の感官をそなえ、とくにふつうではないことを見聞きしているわけでもない場合、そこで起こる感情的反応やその他の感情の状態は、第一次の水準の [反省的ではない感情の] 経験だけで充分である。ふつうでない状況や入り組んだ状況のもとでは、ときには、自省や探索や分析や状況の定義が求められるかも

しれないが、その場合にも認知理論 [SI や心理学の] が述べるような心の機構は必要ではない。なぜなら、そうした場合には私たちは、公然の、それとわかるかたちで解釈等々の実践の活動に携わるからである。」(Coulter 1989: 40)

C-P 論争から 40 年近くたつが、その後の脳神経生理学などの知見のいっそうの蓄積を踏まえた上で、論争（近ごろは構築主義=本質主義論争というらしい）はいまなお続いているようだ。近年の構築主義の立場をとる心理学者・神経科学者バレット (Barrett 2018=2019) を見ても、エクマンの表情は普遍的（ヒトという種に共通）だということを示したとされるエクマンの実験への反証実験を行ったという独自性はあるものの、依って立つ諸論点は、ホックシールドたちの SI の感情の構築主義と基本的には変わらない。そして、そして、その所説を彼女が本質主義者のレッテルを貼る神経学者・心理学者のダマシオ (Damasio 1994=2010) の所説と比較すると、後者のほうが感情と情動についてのより行き届きバランスとれた（「社会文化的諸要因」にも真っ当な目配りがある）構築主義的な説明を提供しているように思われる。彼によれば、「心は一つの総体としての有機体に由来し、そして「自己」とは「きわめてリアルな心の構築物であり、その基礎はあなたの有機体全体の、すなわち純身体における、そして脳における活動にある。[...] 自己とは繰り返し再構築される生物学的状態であって、進行していることをじっと見ているあなたの脳の内側の小さな人間、あの悪名高いホムンクルスではないということ [をここで指摘しておかなければならない]。」(同書: 343) この見解は、本レジュメの 3 頁のところでは抜粋した、ゴフマンのデュルケムを引いての印象管理の必要性についての論述と表裏の関係にあるといえる。「自分」の連続性は意識されているが、それは有機体の内部および外界への反応の一環としてその都度的に構築され続ける意識であり、そこにホムンクルス（言い換えればミードの「I」）はいない。したがって、私たちはさまざまな場面で適切な、そしてある種の一貫性を示しているように読み取れる「自分」を提示し続けるためには、ホムンクルスに紐付けられているさまざまな「内的」な属性や機構ではなく、社会的=相互行為的な実践を頼みにしなければならない。これは、SI 的な構築主義者と近代の常識が手を携えて<sup>xiv</sup> つねにそこへ立ち戻る、デカルト的な心身二元論という啓蒙の顔をした野蛮とすっぱり手を切ろうという提言ともいえる。<sup>xv</sup> そして、「個人の内面についての考察が手薄」と論難されたゴフマンは、1950 年代という早い時点においてすでに、そうした方向に進みうる戦略的地点に陣を敷いていたということが出来る。

### 3. もう一度ゴフマンから始める

ゴフマンの自己と感情表出についての考察を踏まえて、ホックシールドのように心理学を抱えこむのでも、シェフやコリンズのように社会の「マクロ」な説明を目指すのでもなく、コミュニケーション（相互行為）論的な立場から行われた調査研究は、報告者の目の届く範囲ではほとんどない。そしてそれには、ゴフマンの遺業の意義が十分に理解されてこなかったということ以外にも、しかるべき理由があるように思われる。

そうした調査研究の可能性を探ることが、報告者の研究者としての最後の時期の関心（見果てぬ夢？）だった。ゴフマンの元教え子たち<sup>xvi</sup> が立ち上げた会話分析に、ゴフマンのフレームについての視点を接ぎ木して、それに基づくコミュニケーションの中での感情表出へのアプローチができないかと、「笑い」を題材にしてささやかな試みを行ったこともある（中河 2016）。

しかし、そこで試したやり方ではおそらくゴフマンならではの、印象管理に不可避免的に伴う装う、ふりをする、嘘をつくといった行ないを経験的研究の俎上に載せるのは難しいだろう。<sup>xvii</sup> 彼の第二の主著『フレーム分析（以下 FA）』（Goffman 1974）の中心的なモチーフはフレーム（≒状況の定義）の重層化だが、そこでは、その重層化に PSEL にはなかった区分が導入されている。演劇や遊戯や防災訓練などのように活動の参加者全員がその場で行われるパフォーマンスは「作りごと」だということを知っている「フレームの転調(keying)」と、信用詐欺やサプライズパーティなどのように活動の参加者の一部（欺す側）はそのパフォーマンスを「作りごと」だと知っているが、それ以外の参加者（欺される側）はそれを作為のないふつうのパフォーマンスだと思っている「フレームの偽造(fabrication)」が、新しく導入された区分である。そして、PSEL で繰り返し指摘されるように、社会生活の中で行われるパフォーマンスはつねに印象管理とその一部である感情管理を伴い、そしてそうした管理作業は不可避免的にたくさんの小さな「偽造」を抱えこむ。<sup>xviii</sup>

もちろん、嘘やふりや装いの同定も相互行為的な達成物であるから、感情表出を伴う参加者のやりとりを「自然状態」で観察したり、録音・録画したデータを詳しく調べたりすることを通じて、どのようにしてコミュニケーションの中で隠蔽や嘘が「発見」されるかを調べることはできる。「自分のことは本人が一番よく知っている」という常識的なテーゼに沿って、日常生活では感情経験や身体的感覚や嗜好や知識や信念に関しては本人の申告がまずもって尊重されるが、しかし、日常的にも本人の言葉や表出を嘘と判定するさまざまな方法があるだろう。たとえば、感情には志向性がある、<sup>xix</sup> 言い換えれば、感情とその表出は

つねに何らかの対象についてのものだから（コメディアンの仕草が可笑しいから笑う、心ないことばを口にした知人に腹を立てる等々）、状況と表出される志向性の不整合は感情表出の本来性を疑わせる手がかりになりうる（対象が不明な感情表出は、心の病の症候とみなされることさえある(Coulter 1979=1998: 203-213)）。さらに、もっと制度化された同定の方法もある。精神医療やカウンセリングや法廷や教室といったさまざまな制度的場面では一定の手順に基づいて専門家の判断が本人の申告に優先されることがあり、そこで使われる方法もまた研究課題になりうる。

しかし、ゴフマンの「偽造」の概念は、こうしたタイプの調査研究の枠組みには収まりきらない。そこでは、それが開示されれば信用が失われかねないような事実（たとえば、じつは体調は万全だが講義をしたくない）と、表現（たとえば、「お腹が痛い」と発語する）や表出（たとえば、腹部を押さえ上体を曲げしかめ面をする）とのあいだの乖離が前提されている（中河 2019）。しかし調査者は、そのような乖離をどのようにして発見できるのか。先にほのめかした、ゴフマンの感情管理についての知見が広く使われてこなかった「しかるべき理由」とはこのことである。

半ば人類学者でもあったゴフマンは（彼の最初のフィールドは英国のシェットランド諸島にある村落コミュニティだった）自然主義的観察を調査法の基軸として位置づけたが（Goffman 1989=2000）、フレームの偽造や印象（感情）管理やスティグマの隠蔽やパッシングが成功裡に行われているとき、<sup>xx</sup>調査者がその場でそれを見抜くのはほとんど無理だろう。<sup>xxi</sup> おそらく、インタビューによる事後的な聞き取りや、調査者自身の経験を材料にした自己エスノグラフィ的記述以外に方途はないと思われるが、もちろんその種のデータには信頼性の観点から疑問が投げかけられるだろう（調査対象者はちゃんと覚えているのか、嘘をつかないか、調査者はデータ提供者としてどこまで信用できるのか）。とはいえ、それが私たちの社会生活と感情生活の十分に明らかにされてこなかった領域の探究に役立つ可能性がある以上、ゴフマンに立ち戻った感情経験と感情表出の経験的研究は、試みしてみる値打ちがあるものと思われる。

#### 【参考文献】

Barrett, Lisa Feldman, 2018, *How Emotions Are Made: The Secret Life of the Brain*, Pan Books（高橋洋訳『情動はこうしてつくられる—脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』紀伊國

屋書店 2019).

Collins, Randall, 2005, *Interaction Ritual Chains*, Princeton University Press.

Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, Macmillan (西阪仰訳『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社 1998).

-----, 1989, “Cognitive ‘penetrability’ and the Emotions,” in David D. Franks and E. Doyle McCarthy (eds.), *The Sociology of Emotions: Original Essays and Research Papers*, JAI Press, pp.33-50.

Damasio, Antonio, 1994, *Descartes’ Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, Putnam Adult (田中三彦訳『デカルトの誤り—情動、理性、人間の脳』筑摩書房 2010).

Darwin, Charles, 1872, *The Expression of Emotions in Man and Animals*, D. Appleton and Company (浜中浜太郎訳『人及び動物の表情について』岩波書店 1931).

Ekman, Paul, 1975, *Unmasking the Face: A Guide to Recognizing Emotions from Facial Clues*, Prentice Hall Direct (工藤力訳『表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる』誠信書房 1987).

Goffman, Erving, 1953, *Communication Conduct in an Island Community*, Ph.D. Dissertation (Unpublished), University of Chicago.

----- 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday (石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房 1974).

----- 1961, “Fun in Games,” in *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, New York: Bobbs-Merrill, pp.83-152 (「ゲームの面白さ」佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学』誠信書房 1974 1-81 頁).

----- 1963, *Behavior in Public Places*, The Free Press of Glencoe (丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』誠信書房 1980).

----- 1967, *Interaction Ritual: Essays in Face-to-Face Behavior*, Chicago: Aldine (浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学〈新装版〉』法政大学出版局 2012).

----- 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, NY: Harper & Row.

----- 1983, “The Interaction Order: American Sociological Association, 1982 Presidential Address,” *American Sociological Review*, vol.48: 1-17.

----- 1989, "On Fieldwork," *Journal of Contemporary Ethnography*, vol.18: 123-132 (串田秀也訳「フィールドワークについて」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房 2000 16-26 頁).

Hochschild, Arlie Russell, 1983, *Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press (石川准・室伏重希訳『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社 2000).

Hochschild, Arlie Russell, with Anne Machung, 1989, *The Second Shift: Working Families and the Revolution at Home*, Penguin Viking (田中和子訳『セカンド・シフト 第二の勤務—アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社 1990).

Kemper, Theodore D., 1978, *The Social Interactional Theory of Emotions*, John Wiley & Sons. 串田秀也 1988 「『フレーム』と『関与』—相互作用分析における『コンテキスト』の問題へのゴフマンの視角」『ソシオロジ』33 卷 2 号 pp.3-20.

中河伸俊 1999 「社会構築主義と感情の社会学」『社会問題の社会学—構築主義アプローチの展開』世界思想社 pp.198-224.

----- 2006a 「相互行為場面におけるスティグマ—排除と包摂をめぐる感受概念の経験的有用性と実践的インプリケーション」『スティグマの相互行為的マネジメントと文化的構成の研究 (平成 16 ~ 17 年度科学研究費 (基盤研究(C)) 研究成果報告書)』大阪府立大学人間社会学部社会学研究会 2006 年 3 月 1-18 頁.

----- 2006b 「相互行為現象としてのスティグマ」日本社会病理学会第 22 回大会自由報告.

----- 2010 「『自己』への相互行為論アプローチ : 経験的探究に有効な再定式化のために」『人文学論集』28 号, pp.45-71.

----- 2015 「フレーム分析はどこまで実用的か」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン—やりとりの秩序の社会学』新曜社 pp.138-147.

----- 2016 「談話標識としての笑いと『お笑い』—フレーム分析実用のための試行的検討—」『同志社社会学研究』20 号 pp.1-17.

----- 2019 「フレーム分析の実用可能性—fabrication とうそをめぐる試考」東北社会学会研究例会 <E. ゴフマン研究の射程>第二報告 (於東北大学).

----- 2022 「パーソンフッドとスティグマ—自己論とカテゴリー化論のいくつかの課題」『情報研究 : 関西大学総合情報学部紀要』54 号, pp.3-26.

Rosenwein, Barbara H., and Ricardo Cristiani, 2018, *What Is the History of Emotions?*, Polity

(伊東剛史・森田直子・小田原琳・館葉月訳『感情史とは何か』岩波書店 2021).

Scheff, Thomas J., 1979, *Catharsis in Healing, Ritual, and Drama*, University of California Press.

----- 1997. *Emotions, the Social Bond, and Human Reality: Part/Whole Analysis*. Cambridge University Press.

----- 2013, "Goffman on Emotions: The Pride-Shame System," *Symbolic Interactions*, vol.37, pp.108-121

Silverman, David, 1998, *Harvey Sacks: Social Science and Conversation Analysis*, Oxford University Press.

Shott, Susan, 1979, "Emotion and Social Life: A Symbolic Interactionist Analysis," *American Journal of Sociology*, vol.84, pp.1317-1334.

薄井明 2017 「若きゴフマンの知的生活誌—高等学校時代と大学時代—」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 no.24, pp.37-50.

----- 2022 『「スティグマ」というエニグマ』誠信書房.

---

i いっぽうデュルケムは、カントをおおいに意識しながらも、情動的なものを社会生活の基底に置き（『宗教生活の原初形態』における儀礼論、なかんずく集合的沸騰状態を通じての個人への「エネルギー充填」説）、彼のキイタームである集合表象も、カント経由のカテゴリー概念にイメージのおよび情動的要素を加味したものだといえることができるだろう。ただし、こうした側面は、パーソンズによる社会学理論の総合化の試みの中では切り捨てられ、感情中立的な合理的行為が社会システムの骨格としてイメージされて、情動や感情は官僚制的な組織で働く人たちにとっての *haven*（安息所）である家庭の中のみで解発され聖化されるべきものとして位置づけられた（情緒的役割が優位な妻および母としての女性と彼女が祭祀つかさどる *home sweet home*、ちなみに、この構図はもちろんフェミニストであるホックシールドの批判の対象となった *Hochschild with Machung, 1989=1990*）。そうしたパーソンズのシステム理論に対するいわばカウンターとして登場したミード～シンボリック作用論の役割取得概念も、そこには社会化の感情をめぐる側面が当然含まれるはずなのだが、しかし、「主我」と「客我」のダイアログというヘーゲルの弁証法の心理学版を措定して、自省的思考の機制の重要性を強調するその論理構成は、ともすれば認知的かつ合理的な側面に傾斜しがちなものであったように思われる。

ii このウェーバーのスタンスに例示されるような西欧の人文的知（それは「客観的」な科学的探究を進めるための方法論の言説にもしばしば組みこまれた）の伝統を振り返るとき、脳神経学者ダマシオ（*Damasio 1994=2010*）の、私たちの「合理的」推論を下支えするのは情動と感情の過程だとするソマティック・マーカー仮説は、その当否の判断は今後の研究に待たなければならないが、はかり知れない影響をもたらす可能性をそなえたものだと思う。

iii 情動 (*emotion*) と感情 (*feeling*) を互換的なものとして使う（もしくはその一方の語しか使わない）社会学者や心理学者も少なくないが、ここでは（少なくとも報告者本人の地の記述

---

では)、ダマシオによるその二つの語の定義を踏襲することにする (Damasio 1994=2010 第7章)。ダマシオは情動を外的対象への脳・神経系およびその他の全身の器官からなる有機体システムの生理的反応として定義し、そうした情動が“内的に”(外部観察者には知覚されないかたちで)知覚されたとき、それが「怒り」や「喜び」といった感情の経験をもたらすとする(ただし、彼は、そうした情動の表象としての感情とは別に、情動とは無関係な、全身的な身体的状況一般の知覚をもたらす持続的な気分のようなものが存在するという仮説をたて、生きられた経験の一種のBGMのようなそれを背景的感情と呼ぶ)。

iv 歴史学の分野での、エリアスやコルバンを先達とするこれに平行する動きについては、たとえばローゼンワインとクリスティアーニ (Rosenwein and Cristiani 2018=2021) を参照のこと。なお、同書では、ゴフマンは「パフォーマンスとしての感情」という視点を提示した先駆者の一人と位置づけられている(同訳書 pp.70-71)。

v シェフの場合、ゴフマンの「当惑 (embarrassment)」論文やキャラクターコンテストについての議論などを参照した社会統制や争いについての論考よりも、より精神医学やドラマ論寄りの距離化と浄化(カタルシス)についてのオリジナルな所説 (Scheff 1983) のほうが、ゴフマンのフレーム分析とも共鳴する面白さを持っているというのが、筆者の個人的感想である。

vi 「規律を身につけたパフォーマーは、また「自制」ができる人物でもある。そうしたパフォーマーは、自分の私的な問題や、過ちを犯したしたチーム仲間、自分に不適当な好意や敵意を向けてくるオーディエンスへの感情的な反応を抑制することができる。そうしたパフォーマーは、また、真剣なものと定義されている事柄については笑わないようにし、そして、滑稽なものとして定義されている事柄を真剣なものとして受けとらないようにすることができる。言い換えれば、そうしたパフォーマーは、自分が所属するチームのパフォーマンスによって確立された感情の軌道、つまり既成の表出上の状態に沿って物事を感じているという見かけを提示するために、自然発生的な感情を抑制することができる。パフォーマーが禁止された感情を表に出すと、不適切な開示をしてしまったり実務的な合意の違反になったりする可能性があるだけでなく、暗黙のうちにチームのメンバーの地位をオーディエンスにも分け与えることになりかねないから、そうした抑制が必要なのである。そして、規律を身につけたパフォーマーとは、私的な場でのインフォーマルさから、公共的な場でのさまざまな程度のフォーマルさへの切り替えに、混乱させられることなく移行できるだけの平衡感覚をそなえている人物でもある。

おそらく演出上の規律の実践にあたってもっとも注意が払われるのは、顔と声の管理であるだろう。それが、パフォーマーとしての能力の重要な試金石になる。本当の情動的な反応は隠さなければならず、適切な情動的な反応が表示されなければならない。」(PSEL pp.216-217 中河訳)

vii 感情の記憶を援用するという技法が使われたりするこの深層の演技 (deep acting) は、『行為と演技』の1章の「自分が演じている役を信じる」というセクションを再考するためのひとつの補助線になるかもしれない。そこでゴフマンは実生活におけるパフォーマーを、うわべだけの (cynical) パフォーマーと心からの (sincere) パフォーマーの連続体として記述するが、うわべだけのパフォーマーが自己瞞着をして自分は心からのパフォーマーだと考えるという可能性についても言及する。ここでそうしたパフォーマーが、深層の演技を行って心からのパフォーマーが持つような感情経験を作り出している可能性について考えることができるだろう。ただし、「嘘から出たまこと」ではないが、本人が心からだと考え、それに伴う感情も経験しているなら、それを心からのものと考えてどこがいけないのかという疑問が当然出てくるだろう。自己欺瞞や自己疎外の経験が、調査法的に困難を孕んでいるだけでなく、概念的にも問題があるのではないと思えるのは、そのためである。いっぽう表層の演技は、次の脳神経学者の最新の論述のように、自分を瞞せるものではないだろう。「われわれが単に儀礼的に微笑むとき、他人をだます以上に自分自身をだますことはできないのであり、それが先の電気生理学的記録 [見せかけの笑いは、本物の笑いが生み出す脳波のパターンとは違うパターンを生み出すという知見—中河注] がはっきり証明していることである。それはまた、偉大な俳優やオペラ歌手が自制心を失うことなしに、いつもながらの高揚した情動を模倣していける理由であるかもしれない。」(Damasio 1994=2010 p.236)

viii ゴフマンのスティグマもまた「隠す/見せる」という行ないと連動した、相互行為とコミ

コミュニケーションの過程に投錨する概念だったが、その後のスティグマ研究では、ゴフマンの所説には心理学的側面が欠けているという批判が繰り返され、“傷つけられた自己”を精神医学的現象として捉えるといった実践的関心にもとづく調査研究が量産されることになった(中河 2006a; 2006b)。こうした、ゴフマンの所説の筋道と乖離した彼が創唱した概念の名目だけの受容は、ほとんど **exception** ではなく **rule** になってしまっているが、スティグマについてそれを是正する薄井の著書(薄井 2022)が刊行されたことは、死後 40 年にして「やっと」の感もあるが、明らかにひとつの曙光である。

ix 社会学の研究の対象は“社会的なもの”、デュルケムのことばを借りれば「社会的事実」なのだという社会学主義のスタンス(社会学の研究対象を心理学や生理学の水準に還元することを認めず、それを独自の事実性をそなえた固有の存在とみなすという姿勢)をゴフマンは継承した。そして、そのデュルケム流にえば“外在的な拘束性”をそなえた「社会」は、ゴフマンにとっては、(ゴフマンに「マイクロ社会学者」のスロットを割り当てる凡百のマイクロ=マクロリンケージ論者と違って)ほかならぬ相互行為の過程そのものなのである(Goffman 1983)。

x ゴフマンの相互行為場面での表出(ディスプレイ)とその読み取りへの着眼の原点は、おそらく学部生時代の、のちにキネシクス(動作学)を創唱したバードウィステルとの出会い(薄井 2017)であるだろう。

xi ただし、サル学者の間では近年、チンパンジーとゴリラには「嘘をつく」能力があるという認識が共有されつつあるようだ。ちなみに、本文でも触れているが、ゴフマンは『フレーム分析』で、転調と偽造という二つのタイプの「現実」の重層化の行われ方を同定し、ベイトソンの動物の遊びについての知見を参照しながら、高等哺乳類には前者のフレームを活用する能力があるという認識を示したが、「嘘をつく」能力は類人猿に限られるらしいから(ニホンザルにはそうしたことはできないと考えられている)、つまりは、偽造は転調より進化的にみて敷衍が高い現象らしい。

xii 「Does she love me, with all her heart? /Should I worry, when we're apart? /It's a lover's question, I'd like to know //Does she need me, as she pretends? /Is this a game? Well, then will I win? /It's a lover's question, I'd like to know //I'd like to know when she's not with me /If she's still true to me? /I'd like to know when we're kissing /Does she feel just what I feel? /And how am I to know it's really real?」(*A Lover's Question*, written by Brook Benton and Jimmy T. Williams, and recorded by Clyde McPhatter in 1958) こうした「恋をする者」や「ビジネスをする者」の問いの答探しを専門技術化しようとする試みが、エクマンらの表情分析(Ekman 1975=1987)だといえるだろう。

xiii ゴフマンの状況の定義は、トマスの公理(“If men define situations as real, they are real in their consequences”)を先達とする SI や社会心理学の場合のような認知的なものでなく、パフォーマンスを通じた相互行為的な達成物である。次の串田の指摘も参照のこと。「初期にゴフマンは、表出的情報を運ぶ表出的出来事とは「社会的状況 [...] の構造の徴候となる記号であり、この構造には参与者相互の、および参与者の状況への関係が含まれる」(1953 p.63)と述べた。つまり「表出」とは、単に個人の内的心理状態の現れや、「状況」を越えて存在する個人の属性の現れなのではなく、むしろ第一義的には「状況」内での参与者の立場の現れなのである。それはまた、意図的に操作されるか否かに関わりなく、「状況」に参入した個人が不可避免的に構成するものである。／ゴフマンにとって相互作用とは何よりもまず、「状況」内で人々が相互に「立場設定 (alignment)」を行ない合うことだと言えよう。」(串田 1988: 6-7)

xiv その根強さは、たとえば、押井守監督の SF アニメーション映画『攻殻機動隊 Ghost in the Shell』における、完全義体(サイボーグ)化された登場人物の「ゴースト」へのこだわりからも読み取れる。私たちの心や魂への関心は、ついには、「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」などという余計な心配まで引き寄せてしまう。

xv ただし、こうしたイコノクラスト(偶像破壊者)的な(関西弁でいうなら“イキった”)物言いは、ゴフマンのテイストには合わないものかであるかもしれない。虚実の皮膜にこそ人生の華が咲くくらいのは、十二分に弁えていた人であるからだ。と同時に、彼(というかデュルケミアンの社会学主義者)の抜きがたい学術的「業」は、こうしたヴィジョンを(おそらく彼の場合は皮肉な言い回しに仮託するかたちで)否応なく伴うものだったというのが、この報

告者の思い入れである。

xvi 会話分析の創始者はサックスであり、その没後、学業上の同輩だったシェグロフやジェファーソンがその遺業を継いだ。シルヴァーマンの手際よいまとめによれば、ゴフマンとサックスの関係は次のようなものだった。「シェグロフの回想によれば（『LC (=会話についての講義集)』1:xiii)、サックスは1959年にハーヴァードで、そこにサバティカルで来ていたガーフィンケルに会った。しかし、直接に共同研究を始めたのはその4年後になる。1959年から60年にかけて、サックスは大学院の学業をバークレーで始め、そこでアーヴィング・ゴフマンに出会った。シェグロフによれば、「サックスは、ゴフマンを事実上学部教授陣のだれよりも真剣に受け止めていた」(LC1:xiii)。1962年から63年にかけて、サックスは、フィリップ・セルズニック法と社会研究センターの大学院生となり、そこで、ガーフィンケルの影響を受けたもうふたりの社会学者、シェグロフおよびデイヴィッド・サドナウと知り合った。／1963年に、サックスは、自殺の科学的研究センターのフェロウとしてガーフィンケルと共同研究をするためにUCLAに移った。この自殺防止センターで得たデータが、1964年から65年にサックスがUCLAで行った講義で使われたデータの中核部分になった。サックスは、1966年にバークレーで博士号を取得した。それは、ゴフマンが、博士論文審査委員会の主査を辞め、その座をアーロン・シクレルに譲ってからのことだった。シェグロフによれば、ゴフマンは、サックスの議論を「循環論法だ」と論難したという。(LC1: xxv,n.18) (Silverman 1998: 28)

xvii PSELの序論で述べられているように、人びとがやりとりの相手の本当の「気持ち」や「思い」を発見する動きとそれをブロックし演技をする動きからなる情報ゲームの展開を調べるというのが、ゴフマンならではの印象=感情管理研究のプロジェクトである。「たとえば、シェットランド島のある小作人の妻は、ブリテン本島からの訪問客に郷土料理を出すとき、客が礼儀正しいほほえみを浮かべて口にするこの料理は自分の好みに合っているという言葉聞きながら、同時に、彼がフォークやスプーンを口に運ぶ速度や、口に食べ物を入れるときの熱心さ、食べ物を咀嚼しているときに表出される喜色に注目した。こうした表れ(サイン)を彼女は、食べている客が言葉にした感情表現を検証するのに使った。同じ女性は、ある知り合い(A)が別の知り合い(B)のことを「本当のところ」どう思っているのかを知るために、AがいるところにBがやってきて、もう一人の知り合い(C)と会話を始めるのを待った。そして彼女はひそかに、Cと話しているBをながめるAの表情を吟味した。Bと直接会話をしておらず、したがってBに観察されていないAは、ときおりふだんの制御をゆるめ如才のない偽装を解き、Bを「本当のところ」どう感じているのかを気がねなく表出した。つまり、このシェットランド島の住民は、観察されていない状態にある観察者を観察したのである。」(PSEL pp.7 中河訳) こうした人びとの観察を含む行ないをさらに研究者が観察するには、ゴフマンのような人並み優れた観察力を持つ(彼の自然主義的な観察力については没後の追悼の回顧などに証言がある)調査者である必要がある。これは、結構なハードルである。

xviii 偽造の調査研究が孕む困難については、中河(2015)でも検討した。

xix 誤解を招かないように一言付け加えると、感情経験に志向性があるというのは心理的な現象ではなく、概念文法的にそうだということである。ウィトゲンシュタインの影響を受けたエスノメソドロジストのクールターの言い方を借りるなら、私的言語がありえないのと同じ理由から、人の感情経験もまた「公共的」なものなのである(Coulter 1989)。

xx 本日(奇しくもゴフマンの没後40年目の命日)のシンポの午後の部の薄井明氏による第3報告の論題は「ゴフマンの隠し画」だが、氏が推測するようにゴフマンに自分が深く影響を受けたものを隠す傾向がありしかもそれに長けていたとすれば、そうして隠されたもの(今回の報告でいえば哲学者ホワイトヘッドの影響)を見つけ出すのは簡単ではないだろう。氏の報告では、そうした「事実」をuncoverするために、主に状況証拠と細かな痕跡に注目するという手法が使われるが、しかし、そうしたアカデミックな作業も、日常のやりとりの中での同種の試みと同じく、見抜いたと思える「事実」がじつは観察者の構築物なのではないかという疑念を払拭することはできない。

xxi さらに、かりにそれを見抜けたとしても、それをデータとして使った調査結果の公刊は、その乖離が開示されれば信用を失わせるようなものであればあるほど、調査対象者の許諾を得にくいだろうという別の問題もある。